

氏名	梅野 貴恵
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	第2号
学位授与年月日	平成20年7月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者 看護学研究科看護学専攻
学位論文名	母乳育児と更年期症状との関連に関する研究 A study on the association between climacteric symptoms and breast-feeding
指導教員	教授:宮崎文子（主）、教授:甲斐倫明（副）、教授:草間朋子（副）
論文審査委員	主査:市瀬孝道 教授、副主査:稲垣敦 教授、副主査:高野政子 教授

論文内容の要旨

【目的】更年期女性の健康の重要性は、少子化や人口の急速な高齢化を背景にクローズアップされてきている。更年期女性自身の心理・性格の因子や社会・文化的因子は更年期症状の発現に大きな影響をもたらしているが、その要因間の関係は明らかになっていない。更年期女性を対象にした心理・社会的因子と更年期症状（Simplified Menopausal Index : SMI）についての著者の調査から、成熟期における授乳経験と更年期症状との関連も示唆された。そこで、本研究では、成熟期における授乳経験が更年期症状に及ぼす影響を調査研究および実験的研究から分析し、明らかにすることを目的とした。

【研究Ⅰ】

産後12ヶ月以上の母乳育児経験をもつ更年期女性103名を対象にSMIを用いて更年期症状の程度を把握し、人工栄養育児を行なった更年期女性90名のそれと比較した。長期母乳育児経験者のSMIは、人工栄養育児を行なった更年期女性のSMIに比べ有意に低かった。生きがい感や夫婦関係満足感などの心理社会的要因とSMIとの関連が認められたが、生きがい感と母乳育児期間の長さとの関係は認められなかった。さらに、長期母乳育児経験者の更年期症状の関連因子を構造的に明らかにすることを目的に、長期母乳育児群のデータを用いて共分散構造分析を行った。出産回数、母乳育児期間、産後の無月経期間に関連した『出産・育児体験歴』と、生きがい感、夫婦関係満足感、仕事やりがいに関連した『更年期の心理的満足度』の2要因が更年期症状発現に影響していることが認められた。

【研究Ⅱ】

母乳育児を継続中の10名の女性を対象に、分娩直後から産後12ヶ月までの血中ホルモン濃度の推移とSMIを用いた更年期類似症状の発現の程度を検討した。血中ホルモンとしては、エストロジオール、プロラクチン、Luteinizing hormone（LH）、Follicle stimulating hormone（FSH）に着目し、産後2日目、1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、12ヶ月の合計6回測定した。10名の女性のうち、産後12ヶ月までに月経の再開がなかった6名を「月経なし群」、月経が再開した4名を「月経再開群」とした。血中エストロジオールは、産後1ヶ月には減少するが、「月経再開群」は産後3ヶ月から上昇傾向を示した。「月経なし群」は産後12ヶ月まで低値を維持したままであり、閉経後の女性のエストロジオール（21pg/ml）に近似していた。プロラクチンは、産後徐々に低下傾向を示すが、1日の授乳回数の減少とともにプロラクチンの低下が進行し月経が再開する。更年期類似症状の発現の程度とエストロジオールとの間には明らかな関連は認められなかったが、プロラクチンと更年期類似症状との関連が認められた。したがって、授乳期女性の更年期類似症状は、エストロジオールが低下していることだけでなく、プロラクチンの上昇も重なっていることが影響していることが推察された。

【研究Ⅲ】

母乳育児を継続している女性の骨密度の推移を推測する目的で、研究Ⅱの調査対象者の右踵骨の音響的骨評価値（Osteo Sono Assessment Index : OSI）を測定した。「月経なし群」の産後12ヶ月のOSIの変化率は、「月経再開群」に比べ、減少傾向を示しており基準値にもどっていなかった。しかし、「月経再開群」は産後12ヶ月では基準値にほぼ回復していた。

【結論】

成熟期に母乳育児経験のある女性の更年期症状は軽く、その内分泌系の経験が女性自身の心理面に影響を及ぼしていることが明らかとなった。また母乳育児経験のある女性は、更年期に起こる内分泌

系の変化に対する順応性を高めている可能性が示唆された。これらの結果は、助産学に新たな知見を提供するものであり、とくに授乳期女性の血中ホルモン値は、産科内分泌学において貴重な基礎データを提供するものである。

Abstract

The purpose of this study was to investigate the association between climacteric symptoms and the breast-feeding. The first research was to examine the proportion of SMI scores in 103 women with the long-term experience of breast-feeding. The SMI scores of the subjects were compared with those in 90 women with experience of bottle-feeding. The SMI scores in women with experience of breast-feeding was lower than those in women with experience of bottle-feeding. Since the associations between the SMI score and psychosocial factors were observed, we analyzed the survey data on women by the covariance structure analysis using Amos to make the expression model of climacteric symptoms in women with the long-term experience of breast-feeding. These model analysis showed that climacteric symptoms were affected by climacteric's psychological satisfaction in addition to the experience of delivery and child care. The second research was to examine the transition of hormones in the blood until 12 months postpartum in women during lactation, and the proportion of climacteric-like symptoms. The transition of estradiol, prolactin, luteinizing hormone(LH) and follicle-stimulating hormone(FSH) in blood were determined in ten women during the period of breast-feeding. The hormones in blood were measured during the puerperium on the 2nd day, one month, three months, six months, nine months, and 12 months postpartum. While the estradiol in all women decreased one month of postpartum, that in four women who had resumed menstruation increased at three month postpartum. Estradiol remained low during the period of breast-feeding, and that in women with amenorrhea until 12 months post-partum was similar hormone level (21pg/ml) in the blood of general climacteric woman. Prolactin declined gradually until 12 months. The trend was strongly related with the number of times of breast-feeding. The climacteric-like symptoms in women during lactation were affected by ascent of prolactin whereas no relation with estradiol. The third research was to examine the transition of Osteo Sono Assessment Index (OSI) until 12 months postpartum in women during lactation. In four women who had resumed menstruation returned to the baseline within 12 month of postpartum. These results suggest that the hormone state of the lactation, low estradiol and high prolactin, causes climacteric-like symptoms, and that the adaptation to the change in internal secretion at menopause is promoted, and that hormonal change at delivery, breast-feeding and amenorrhea in the period of maturity affects psychosocial factors at menopause.

論文審査の結果の要旨

更年期症状は誰しものが軽減したいと願う課題であり、更年期を迎えた女性のヘルスケアを推進する上でも、その予防面での研究が求められている。本論文は、自らの助産師としての体験から母乳で育てた女性は更年期症状が軽く、人工栄養で育てた女性は重いという独自の仮説を立て、調査研究を行った。その結果、母乳育児は更年期症状を軽症化し、それが母乳育児の長さに依存していることを見出した。母乳育児期間や無月経期間長さから、低エストロゲンレベルの長期持続を推察し、これら生理的要因や生きがい感・夫婦関係満足感といった心理・社会的な要因が更年期症状の軽症化に関わっていることを明らかにした。更に、実験研究によって母乳育児期間中の低エストロゲンレベルの持続が、更年期女性と近似の症状や骨量低下をもたらし、この経験が生理的アダプテーションやトレイランスを誘発して後年の更年期症状を軽減することを提唱し、更年期女性の健康増進の観点からも母乳育児の重要性を示した。また更年期症状発現の要因間の関連性から、将来的な更年期女性の更年期発症モデルを構築した。

本研究の仮説や研究の進め方は独創的であり、その成果は、更年期障害の軽減と予防に繋がるものであり、看護研究として高く評価できるものである。特にモデル化の発想は今後の研究の方向性と発展性を示したものであり、更年期女性のヘルスケアへの介入・支援を行ってゆく上で有益な基礎データとなるものである。今後、一般の更年期女性に当てはまるモデル化が構築できれば、更年期女性のヘルスケアに対してより効果的な看護介入を導き出されるものと期待される。